

## ～今年のRSウイルスの遺伝子型について～

### <RSウイルスの季節です>

RSウイルスは、呼吸器系疾患を引き起こす代表的な原因ウイルスです。生後1歳までに50%以上が、2歳までにほぼ100%が初感染しますが、一度の感染では終生免疫は獲得できず、再感染を繰り返します。

例年、奈良県では全国的な状況と同じく、季節性インフルエンザに先行して7月頃に流行が始まり9月頃に患者数が急増し、年末をピークに春まで続きます。

今年は夏からの流行はみられず比較的落ち着いていましたが、ここ数週間、定点当たり報告数が増えてきています。これから冬にかけてさらに患者が増加すると考えられるため、その動向に注目しています。

### <変異型の検出状況>

RSウイルスは血清型によりA型とB型に分かれ、さらにウイルス表面のG蛋白、F蛋白により、多くの遺伝子型に分けられます<sup>1)</sup>。本県のこれまでの発生動向調査の結果、2012年まではA型はNA1、B型はBAを検出し、毎年どちらの型も検出してきました。

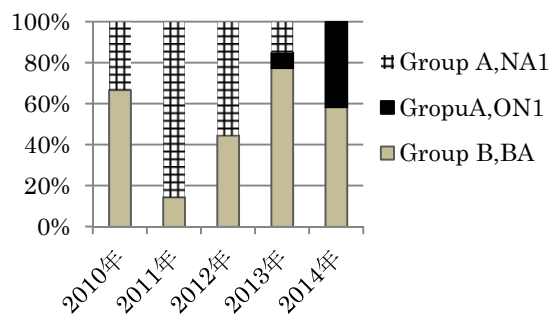
2013年には、本県ではこれまでみられなかったNA1の変異型である **ON1** を3株、初めて検出しました。ON1は、遺伝子の塩基配列に反復配列が挿入された変異型です。今年はこれまでのところ、従来までのNA1はみられず、このON1を検出しています(図1)。昨年の3株は、桜井保健所管内の同一の医療機関から採取された検体でしたが、今年に入ると桜井に加え内吉野、葛城保健所管内の検体からも検出しています。国内では神奈川県や新潟県<sup>1)</sup>、栃木県<sup>2)</sup>などですでに検出されていますが、近畿地方の状況は明らかではありません。

今年、本県で検出したON1の疫学情報は、0歳～7歳の男女5人で、診断名は気管支炎3、RS疑い1、インフルエンザ1でした。臨床症状は38.0℃～40.1℃の高熱と、上気道炎や気管支炎でした。

臨床症状に関して、従来の型とON1とで差異があるかどうかについては、ON1の例数が少なく不明です。全国的にも、従来型と比べた臨床像への影響は十分分かっていませんが、ON1を含む一部の遺伝子型では臨床的に重症化するともいわれているため<sup>2)</sup>、注目すべき点であると考えています。

本県では、9月以降にRSウイルスを検出したのは1検体で、遺伝子型はB型(BA)でした。今冬のON1の動向はまだ分かりませんが、検出数全体におけるA型の割合が昨年と比べ増加していることも考えると、ON1の検出が続くことも予想されます。そのため、遺伝子解析を継続して今後の動向に注意をはらう必要があると考えております。

定点医療機関の先生方には、引き続き検体採取にご協力をお願い致します。なお、迅速検査でRS陽性のものでも、型識別に大変役立ちますので、よろしくお願ひします。



(図1) 検出したRSウイルスの年別遺伝子型解析結果

#### 参考文献

- 1) 齋藤玲子、他:わが国のRSVの分子疫学、IASR Vol. 35 No. 6
- 2) Tsukagoshi H, et al., Microbiol Immunol 57: 655-659, 2013



(ウイルス・疫学情報担当)